

—2017年度 卒業式より—

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な人、言葉、経験、そして自分との出会いがあり、その全てに豊かな学びがありました。時には壁にぶつかることもありましたが、いつもその「出会い」が私たちの心の支えとなり、試練を乗り越えさせてくれました。そして本日、ここに私たち 304 名の卒業生は喜びと祝福のうち、集まることができました。

活水学院は今から 139 年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なるすべての者が、いつまでも渇くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命をえるように」との祈りを込め、Elizabeth Russel 先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。今回私は、卒業生を代表して、「白」と「臙脂色」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。白色のリボンには、「温かく包み込む太陽のように、また月や星のように暗闇の中でも誰かの光となり、世のリーダーとして輝いてほしい」との願いを、臙脂色のリボンには「無償の愛。隣人を愛することを恐れず、何より自らを愛することができる人になってほしい」との願いを込め、お譲りいたします。

在学生の皆様、どうかこの 2 本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、新約聖書フィリピの信徒への手紙 4 章 13 節の御言葉「私に力を与えてくださるお方キリストによって、どんなことでもすることができる」をお贈りいたします。

この日まで私たちの学びを支えてくださった教職員の皆様、励まし合いながら共に歩んできた友人たち、また、祈りをもって私たちを見守ってくれた家族、そしていつも共にいて導いてくださった神様に感謝いたします。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう心よりお祈り申し上げます。

花木理子（文学部英語学科 4 年）

魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりましたこの手桶をお譲り頂きました。

今年は新たに、「温かく包み込む太陽のように、また月や星のように暗闇の中でも誰かの光となり、世のリーダーとして輝いてほしい」との願いを白のリボンに、「無償の愛。隣人を愛することを恐れず、何より自らを愛することができる人になってほしい」との願いを臙脂色のリボンに託し、結び加えて頂きました。

わたくしたち在校生は、この 2 本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渇くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として、歩んでまいりたいと思います。

卒業生の皆様は、この学び舎で、神様からの限りない愛を受け、先生方や友人、ご家族の祈りに支えられながら、様々な体験や学びを通して大きく成長され、本日晴れの日を迎えられました。

これからは、それぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、困難を覚える時や、忍耐が試されるときもあると思います。しかし、どのような時にも、いつも神様は共にいて、導いてくださいます。どうぞ愛と希望をもってこれからの道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心よりお祈り申し上げます。

音楽学科 1 年 高濱宥樹

朝の礼拝から I

「Life in God's Service」

ローマの信徒への手紙 12 章 6-8、11.12 節

In the Bible, Saint Paul gives us instructions on how to live our lives in God's service (Romans 12: 6-8,11,12). He reminds us that we are each blessed with different talents and abilities, and that we should use these gifts well, each and every day. We should work hard and be content doing so.

In our daily lives we all have many things we must do, as students, teachers, and other workers here at Kwassui. We have duties to perform and expectations about how we should act, which is natural and reasonable. Why is it then that we, or people we know, sometimes see these responsibilities more as hardships, as obligations being imposed on us, whereas others see their work or studies in a more positive light, as opportunities? These people believe they have opportunities every day, to do good, to accept responsibility and to use their own unique gifts to contribute to society. They may also see the daily challenges they face as a chance or time for growth, whether personal, professional or spiritual.

For most of us our circumstances are basically set or fixed – this is where we are, and this is what we must do. And yet two people in the same situation can regard their experiences as almost opposite: hardships versus opportunities. Perhaps it is a question of attitude, for while our surroundings may be fixed, how we see ourselves and the world around us is flexible. Our attitudes are flexible. Given the pressures and stresses of daily life, in our studies or work, it is understandable that we occasionally feel more like the person who is “enduring hardships”. Reflection upon our lives and ways of thinking can prevent this from becoming a habit, however.

Our attitudes are flexible: we can choose how we look at our lives and responsibilities. This choice is ours every moment of every day: are our experiences mainly hardships to endure, or are they opportunities to do well, to serve and to grow?

Let us be thankful, then, that we have all been blessed with different gifts and try our best to always use these gifts well. Let us also be grateful for opportunities to serve, as we carry out our daily duties and lives in God's service.

John Anderson (英語学科)

朝の礼拝から II

「人を裁くということ」

(マタイによる福音書 7 章 1 節～6 節)

この聖書の箇所の見出しに、「人を裁くな」とあります。なぜ神様が人を裁くなと言われるのかというと、あなたがたも裁かれないようにするためだそうです。その理由を探してみましょう。

聖書ではよく例え話が登場します。ここでは、神聖なものを犬に与えてはならず真珠を豚に投げてはならないとあります。神聖なものは、そう思うから神聖なものとして成り立ちますが、神聖だと思わない人から見ると意味のないものになります。

この話を讀んだとき、単純な話と思いがちですが、違った見方もできそうです。冒頭の、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の分かるはかりではかり与えられるという言葉を出してきましょう。

私たちは何かをするときに、自分の主観で判断をしていないでしょうか。人に何かをする時、される側が本当に必要とすることをできていないことはよくあります。乗り物の座席を譲ろうとしたら、そんな年じゃないので結構ですと言われてたりすることはよくありますね。(勝手に見た目で判断していたということ)

これは、勝手にそうしてあげるといいに違いないと判断(人を裁いています)し、結果自分が裁かれるという神様の言葉の通りです。そうすると、神聖なものを犬に与えてはならずという言葉は、犬や豚は神聖なものや真珠という貴重なものを理解できないという例えだけではないと思います。

神聖だ、貴重なものだというのはあくまで主観です。何かをする人がそう思っても、受ける側との捉え方に幅があり、自分に跳ね返ってくるということを神様は伝えたいのではないのでしょうか。ではどうするべきか。福音書の続き 12 節には、自分が一方的にこうしたらいいだろうと思ったことをするのではなく、自分がしてもらいたいと思うことを人にするようにしなさいということを神様は伝えています。この聖書の言葉を心に留め、一日を過ごしてまいりましょう。

中野 忠彦(経理課)

朝の礼拝から I

「Faith that works through love.」

Galatians 3:28

In his letter to the Galatians, Paul tells us to embrace diversity as we are all one in union with Jesus Christ. The central message of the letter is how Gentiles, non-Jews, could convert to Christianity. At that time, most converts were Jewish. Paul is quite clear: no matter what a person's background, anyone could be accepted, "what matters is faith that works through love" (Gal. 5:6).

I was thinking about diversity as I watched the World Cup in June. I was very excited when my country of origin, England, made it to the semi-finals. Many news reports commented on the diversity of the four European teams in the semi-finals. Most of the French players were from migrant backgrounds, their families mostly coming from Africa. Nearly half the Belgian and English players were first or second generation immigrants, and 15% of Croatia's players were born in a different country. I was happy to see these positive role-models, a contrast to the negative images of migrants which we often see.

In my class about multiculturalism, students learn about multicultural societies and how they deal with the issues they face. Many students are interested in this topic because they feel Japan should become more multicultural, by accepting more migrants to work and live here as members of Japanese society. I recently read an article which featured an elementary school in a rural area of Mie prefecture, in which over half the children have at least one parent from another country. The children speak nine different languages at home but use Japanese at school. The article focussed on the positive effects of immigration into rural areas which are suffering from depopulation.

When they visit Australia to study early childhood education, students are always impressed by the way multiculturalism is a part of the curriculum even from the start of childcare, with the walls of the rooms for babies and toddlers decorated with images from other cultures, including those of Aboriginals. Students see children as young as four learning Japanese, using an app on I-pads to develop listening and speaking skills, or in classrooms with specially trained teachers of Japanese as a foreign language. I hope that those students will work to make their own future classrooms more inclusive, accepting and understanding of diversity, teaching the children to love their neighbour as themselves (Galatians 5:14).

子ども学科 政次 カレン

朝の礼拝から II

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」

テサロニケの信徒への手紙一 5章16～18節

私の兄は昨年12月末に急性大動脈解離により緊急搬送されました。

急性大動脈解離は発症後1時間あたり1～2%の致死率という非常に高い水準で症状が進行し、亡くなった方のうち60%は病院に到着する前に死亡するという報告もある恐ろしい病気です。

兄は10時間を超える手術を耐え抜き、術後2度も脳梗塞も起こし本当に生命も危ぶまれたのですが、無事に退院。その後、リハビリをしながら担当のお医者様も驚くくらいの回復力で4月には仕事にも復帰しました。

兄は「本来ならば死んでいたかもしれないのにいろんな偶然が重なって今生きている。

まだいろんなやらなければならないことがあるから自分は生かされてるのかもしれない」と言っています。

普段私たちは、健康で当たり前、家族がいて当たり前、働くことが当たり前、学校に行けることが当たり前、友達と遊べるのが当たり前、食事をすることが当たり前、そして生きることが当たり前だと思っています。しかし病気になると、当たりのことが当たり前ではなくなります。私たちが「当たり前」と気にもとめないことも、よくよく考えてみると「感謝すべきこと」と気づかされます。生きていること自体奇跡であって、生きていることは当たりのことだけれど、様々な偶然や奇蹟の巡り合わせが重なった結果、私たちはこうして生きています。いや生かされています。

タイトルは今年度の学院聖句です。もしこの聖句を目にすることがあればその場所、その瞬間に感謝し、どんなことにも感謝の心を忘れないでいましょう。神様が私たちに望まれています。

総合企画室 山上亜紀

- 朝の礼拝から I -

「ここが世界の中心です」

マタイによる福音書 6 章 33 節

活水女子大学のシンボルとも言える本館の校舎は、クリスチャン建築家として一斉を風靡した W.M. ヴォーリズとその弟子によって建築されました。

ヴォーリズは 100 年以上前に、24 歳という若さで、当時寂れた寒村であった滋賀県近江八幡に宣教師として着任しました。その後、建築家となり全国に 1500 を超える建物を設計、現存するいくつかの建物は国の重要指定文化財となっています。建築の輝かしい実績に加え、近江兄弟社という商社を設立し、有名なメンソレータムの販売を手始めに、当時としては先進的なサナトリウムを備えた医療事業、幼稚園や女学校経営をはじめとする教育・福祉事業など、その生涯において数多くの事業を手がけたことでも有名です。

このように事業家としても成功を納めたヴォーリズは、サインを求められた時、カタカナの自分の名前の横に大きな丸を描き、その真ん中に点を描いていました。そこには「ここが世界の中心です」という意味が込められており、ヴォーリズが生涯にわたり留まり続けた近江八幡を指していると言われていています。ヴォーリズは宣教師として近江八幡に着任してから、その街で生きると決め、この場所こそが世界の中心と考え、この街を拠点として、先に説明したような数々の事業を成して行くのです。

私たちの住む長崎は日本の西端に位置し、学生たちからはしばしば、この街は田舎で何も無い、という意見を聞きます。しかし、ヴォーリズのように長崎に生きる私たちが、この街を世界の中心として活動していけば、身の回りの様々なものがポジティブに変化していくのではないのでしょうか。こうした発想の転換は自分自身を、そして地域を変えて行く力になるのではないかと思います。

橋口 剛 (生活デザイン学科)



- 朝の礼拝から II -

「いつも喜んでいなさい」

テサロニケの信徒への手紙 I 5 章 16~18 節

私はチョ・ウナといいます。今年 4 月より韓国のペファ女子大学より、編入しました。

今日は中学生の時から今までのお話をしたいと思います。中学校は女子校でした。あの時の記憶はあまり幸せではありませんでした。私は入学してから周りからよく疎外されたり、結構クラスメイトからいじめられたりした経験があります。

もともと自分の性格は前向きで、言ってみれば普通に明るい人でした。しかしあの時から自然に気が弱くなりました。中学 2 年の時にはいじめに耐えることができずに学校を転校することになりました。それで、神様の助けを求めて、家族も私のために祈ってくれました。自分も友たちがたくさんできるように一生懸命にお祈りしました。

具体的な話とはできないことが残念ですが、人は辛い思いや耐えがたい経験によって神様に導かれることを学びました。いつも良いことばかりのときには、神様のことをすぐ忘れがちな生活をしています。それが人間の弱さではないかと思います。しかし、神様は辛いこととの出会いを与えて、神様に祈るようにするのです。

活水学院の今年の聖句は、幼い頃から教会で聞いてきた箇所、私もよく知っている箇所です。「いつも喜んでいなさい」とは、例えば、ひどいいじめのときにも「喜んでいない」ということになりますね。いじめられても、神様はそのいじめを通して、神様に祈るようにするからだだと思います。神様が人には言えない心の叫びを聞いてくださる。それが、神様に近づくことだと思います。だから、喜んでいられるのではないかと思います。始まったばかりの留学生活ですが、神様の恵みと愛をいつも覚えながら辛い時も楽しい時も感謝をもって過ごしたいと思っています。

趙 恩娥 (英語学科 3 年)

- 朝の礼拝から I -

「恐れるな」

マタイによる福音書 10章 26～31 節

新年を迎え、皆さんはどのような抱負をお持ちでしょうか。抱負を持つことは今年一年の目標を持つことであり、私も毎年、今年はこのことを頑張ろうと考えます。ところで毎年、その抱負は達成されているでしょうか。努力して成し遂げられることもあります。どんなに努力をしても結果が出ないことも多々あります。私たちがどんなに努力をしても、結果をコントロールすることはできません。私たちの人生における努力はもちろんのこと、歴史をみても人間にコントロールできることはほとんどありません。どんな偉人も誰一人として、自分の思い通りに人生を歩んだ人はいないのではないのでしょうか。私たちは頑張っただけで目標に向かって歩みますが、自分自身の髪の毛1本が生えるのか、抜けるのかでさえコントロールできないのです。

何もできない私たちに向けて、聖書は「恐れるな」と語っています。私たちがいま活水学院で学んでいる、または働いていることは、私たちの努力のおかげでしょうか。そうだという人もいるかもしれませんが、なぜか理由はわからないが結果として活水に来てしまったという方もいると思います。神さまは私たちの人生を考えられ、備えられて私たちを活水学院に招いてくださったのです。私たちは神さまの大きなご計画の元、神さまを信頼して日々、歩いていけば良いのです。31節の「恐れるな」は、私たちに向けてイエス様が述べられたみ言葉です。卒業に向けて不安な人、将来が不安だと思っている私たち一人ひとりに、「恐れるな」とイエス様は語りかけてくださっています。恵みに感謝し、日々の生活を送る1年となりますように。

音楽学科 椎名 雄一郎



- 朝の礼拝から II -

「喜んで与える人を神は愛してください」

コリントの信徒への手紙 第二 9章 7 節

私の祖母は信仰深くとても柔和な人でした。イエス様に倣って生きたアシジの聖フランシスコを心の拠り所とし、祈ること・清く貧しく生きることを貫いた人だったと思います。祖母には「神様のみこころの通りに私をお使いください」という凛とした信念があり、神様の愛を、優しさや笑顔・癒し・居場所といった形で他人に届け続けました。他人の困難な状況もごく自然に受け入れ、「大丈夫。マリア様がお導きくださるとよ。」としなやかに前に進む姿は私の憧れでした。幼い頃、祖父母宅に住み私たち兄弟が慕っていた親戚のはずの男の子が、実はご家族が養育できない事情から5年ほど預かって中学卒業まで面倒をみた人だった、と随分後になって知った時には胸が熱くなりました。

17年前になりますが、人に尽くし質素に慎ましく生きた女性の最期は、驚くほどに多くの方々と華やかな献花とあたたかい聖歌に守られて、大変美しく清らかだったことを覚えています。今でも「お祖母様にはよくしていただいたよ。お祈りさせてもらっていますよ。」とお声を掛けてくださる方もいて、「人の価値とはその人が得たものではなくその人が与えたもので測られる」...、以前チャペルで伺ったこの言葉が心に沁みてきます。

神様から私たちに示された愛である“イエス様のご降誕”を祝うこの時期、その愛をいただくにふさわしい人であるよう自分を見つめ直そう、と反省いたします。自分第一に何でも欲しがり、受け取るばかりに夢中になっていては神様は悲しまれることでしょうか。欲しいものを我慢して誰かの助けに...、困っている人に何か私にできることを...、と他人のために自分を差し出す小さな一歩を待っておられるのではないのでしょうか。神様に愛され守られている私たちなのですから、神様のみこころに従って生きることの喜びについて考え、行いに繋げていく力を養いたいと願います。

文学部事務室 橋本 祐子